



繪本拾遺信長記

後篇

二

特別
13
2507
15





還  
2507  
23-15

繪本拾遺信長記後滿卷之二

目録

勝家盛政討一揆事

小園一揆の源進安虫と春る

勝家盛政一揆を討

小田の諸石山と素る二葉

小田の石山と攻る事

小園茶勇哉

繪本拾遺信長記後滿卷之二



重幸婚書令致松永幸

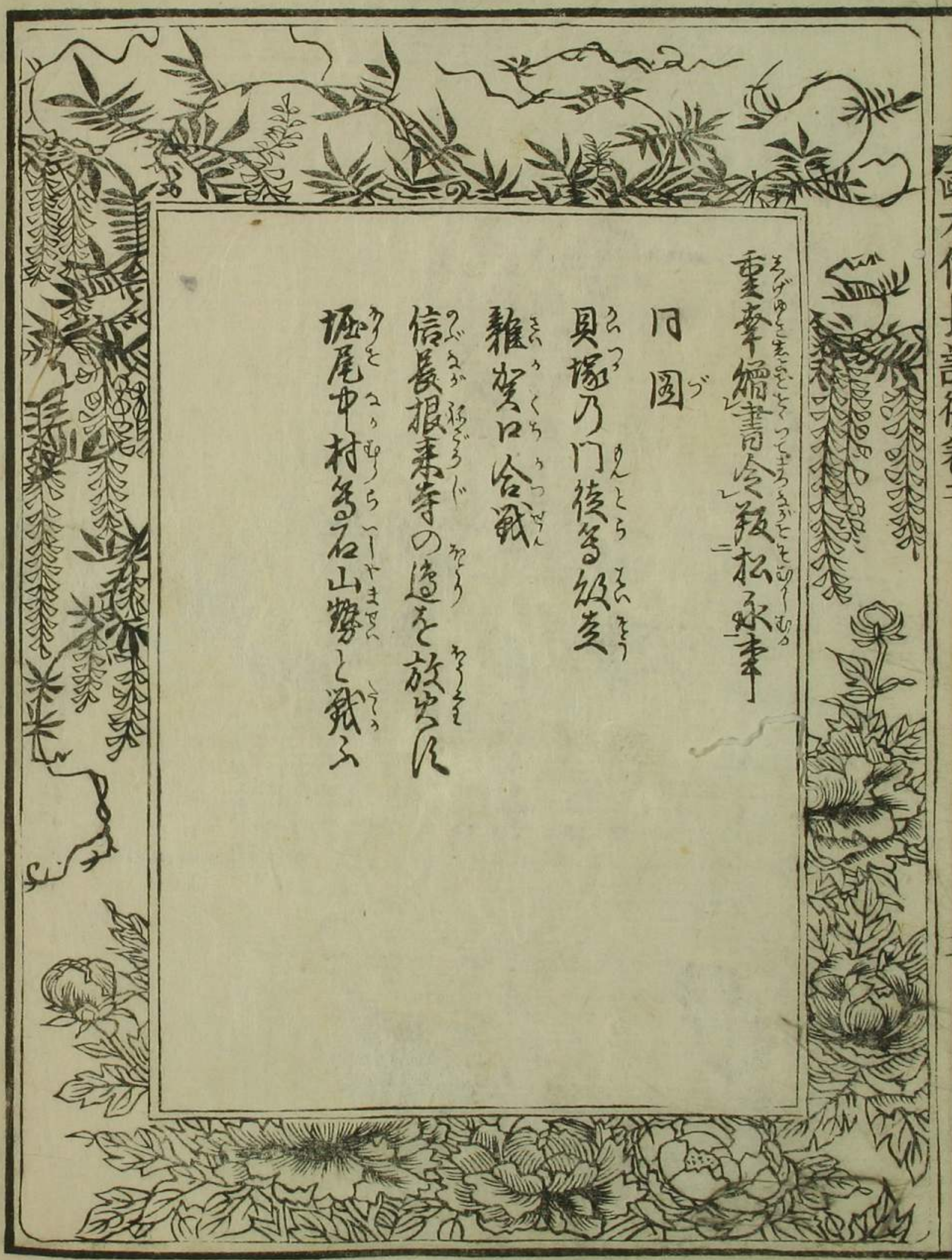
日圖

貝塚乃門後等致

雜賀口合戦

信長根来寺の邊を放火

堀尾中村多石山勢と戦ふ



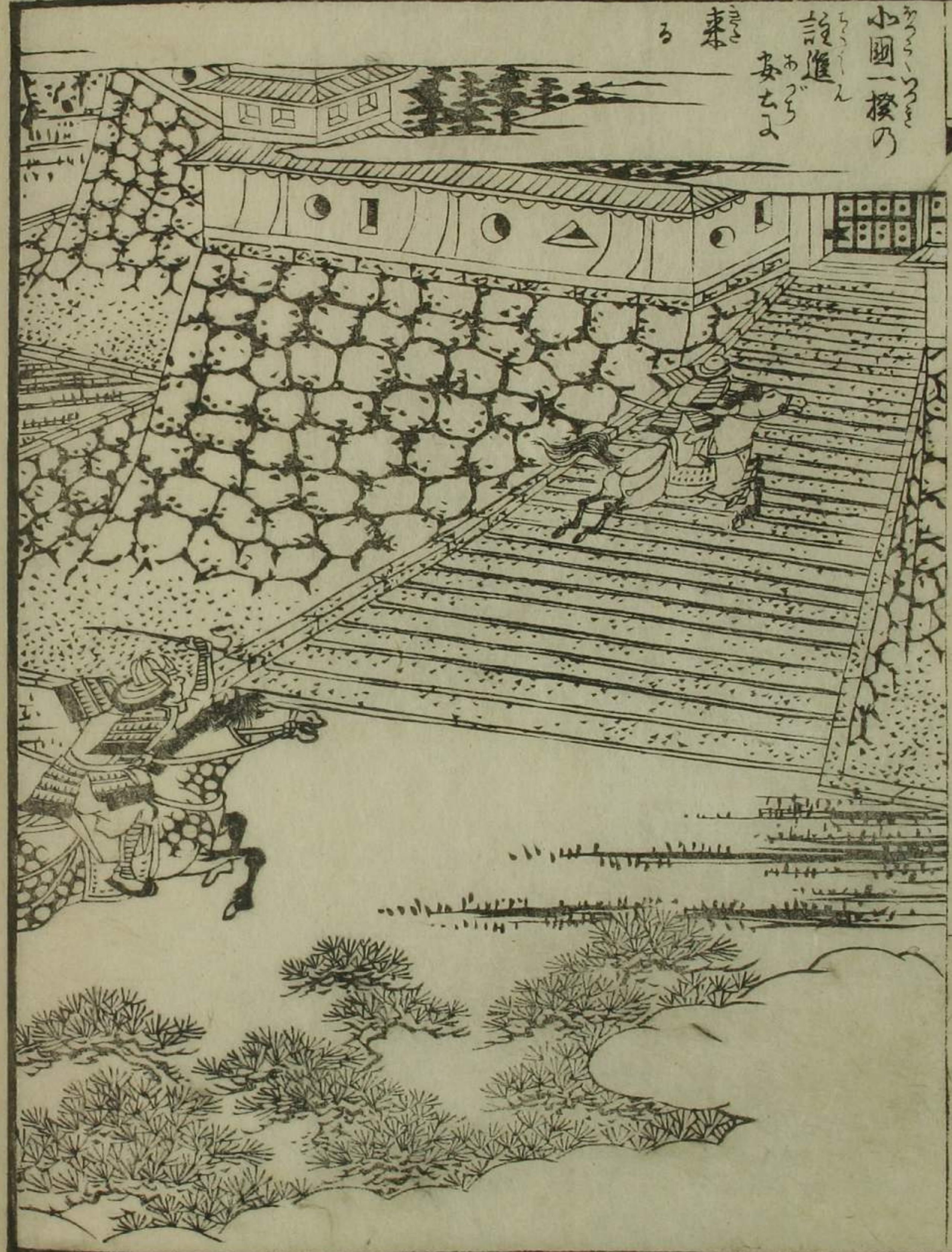
繪本拾遺信長記後篇卷之二

勝家惣政討一揆事

天正九年秋八月小田信長と安土の城と相見し時が中國毛利  
家より本願寺へ兵糧と入割へ味方のお士若平討死の由  
使せ給ひ一とびの怒り一とびの騒ぎな外なる本願寺のころ  
まひ石山とて人妻あはれしと竹子や大業と如就せん石目  
出馬し妻あはれしと後せしきる實又故室町の將軍義昭  
云い云る天正元年横道よより自滅の故と云紀伊國より  
押野川難関の邊に沈みぬ」と本願寺と人妻とまひく  
りし事とせ中國へ潜りぬとせ徳後の朝の津よ難関石  
て密に毛利輝元播州別所多と謀り合せ石山本願寺







小國一揆の  
論進  
あつら  
妻七又  
る 泰

画本信長討後二卷



と力と合せ再び京都と表すなり方家再貞の計議と  
 備されたる毛利本願寺とはじめ率のりよ令儀信長  
 備儀の治後よりく之代る小加賀國大聖寺の城と初より  
 たる戸次右近又馬と合て安土の城へ治進したる本願寺の  
 門徒等先を留探之ぬが妙堂と信し一揆と企て居振  
 橋本地山等又若とくまよりく大聖寺の城又押寄合戦  
 及びい組一揆の勢目く又まり今り退治はしつれやうに  
 におる人いあく所勢と仰し治り急を征伐はし治りんが  
 申しきちるりよ及びいんと櫛の齒と引どく退く治進し  
 たりたる是よりい信長いよく本願寺と悪く勝りけ  
 城急を征せどんが枕を備じ難しとて先多々同去蕃民

聖政を大ぬとして教万の軍勢と合て加賀の一揆と討しめ  
 らる就中城本山の底の城を柴田修理進勝家の聖政  
 叔父の仕が他よ力と合せ平治とんきはし命と治り勝家  
 かいこまり云蕃民と一もいあり加賀國へ殺回はけ附一揆  
 系不く又城と揃へ勢い極よるまひたる柴田多々同の  
 両お天神山の城又押寄八面よりえ圍と居夜のかちも  
 かく二日二夜責治たりしが一揆多防ぎ支へき力費城を  
 捨く治勢と逃はまじと退とがくく由よ居振探の城  
 へたりけ息とも機せは探とりたる城中の一揆安と破つ  
 じと矢と飛し大木大石と投うけまじく防ぎ殺し  
 かく小あまの兵率府と勢ある者甚度し附よ多々同去蕃





南無阿弥陀仏



勝家聖政  
一揆と討

南無阿弥陀仏



既が先づ徳山又ま湧とつゝ智謀の士ありて豊政が元來  
 て中々の城の中の一揆必死と極め防戦し上り味方死傷  
 の者少くはるが味方又は「殆ど急な為城いへば」某  
 又百余人の軍兵と他不へ引受け南無阿弥陀佛の籠と  
 押す本願寺門徒の加勢の体又見せし味方の勢の後  
 より討てりつゝ仍つて曰士軍とるは元來軍法と悟ら  
 る一揆が實に味方より援兵と心得城中より出  
 だし其時外は伏兵と構へ引遠く城と棄るが只一挙の  
 功とぬらば」とつゝ又舊記是と定て即此因勝家と信じ  
 て徳山が計畧と同く勝家大なる歎びけ謀きりめてあり  
 先年信長も石山河津の所某が治一は埋伏しる本願

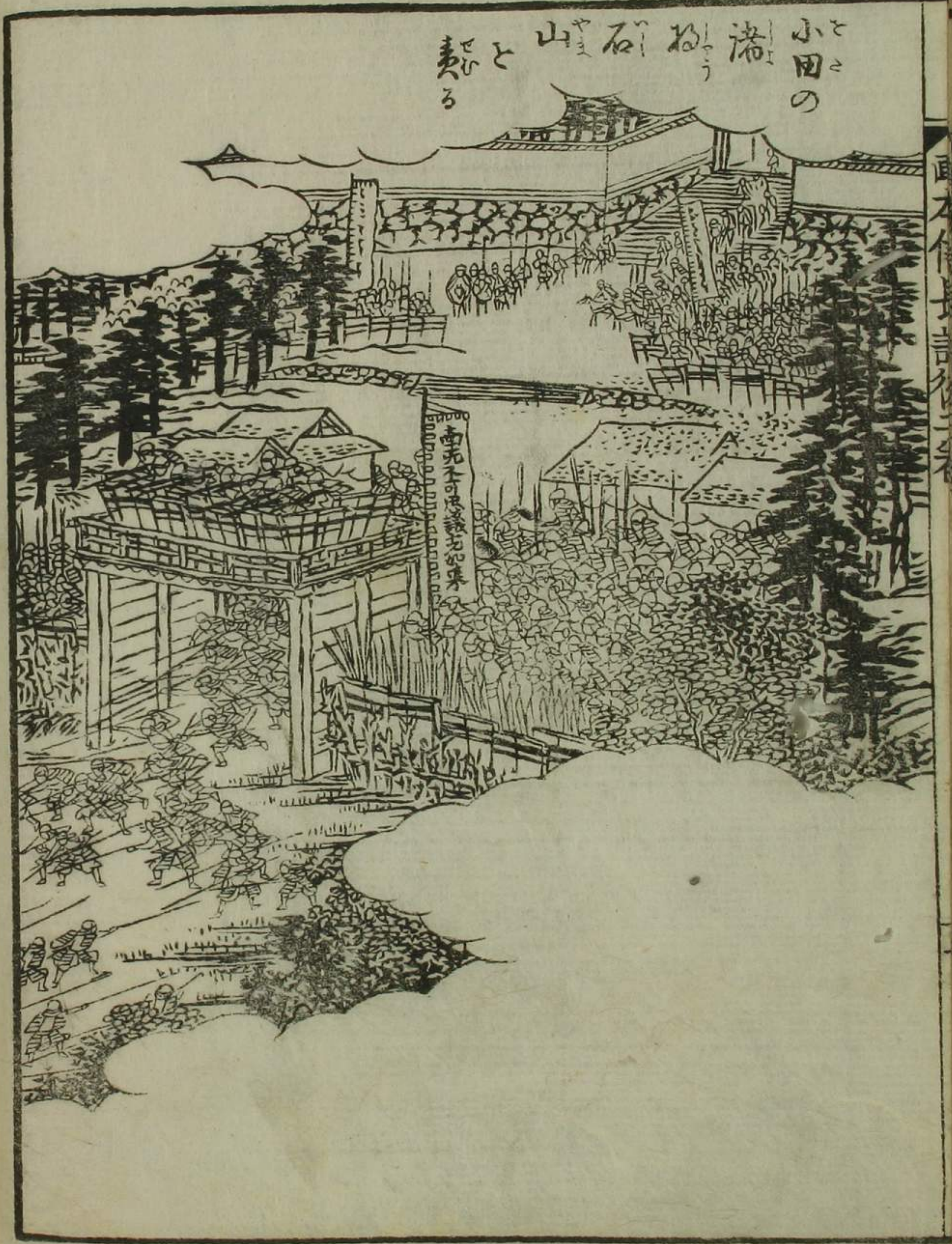
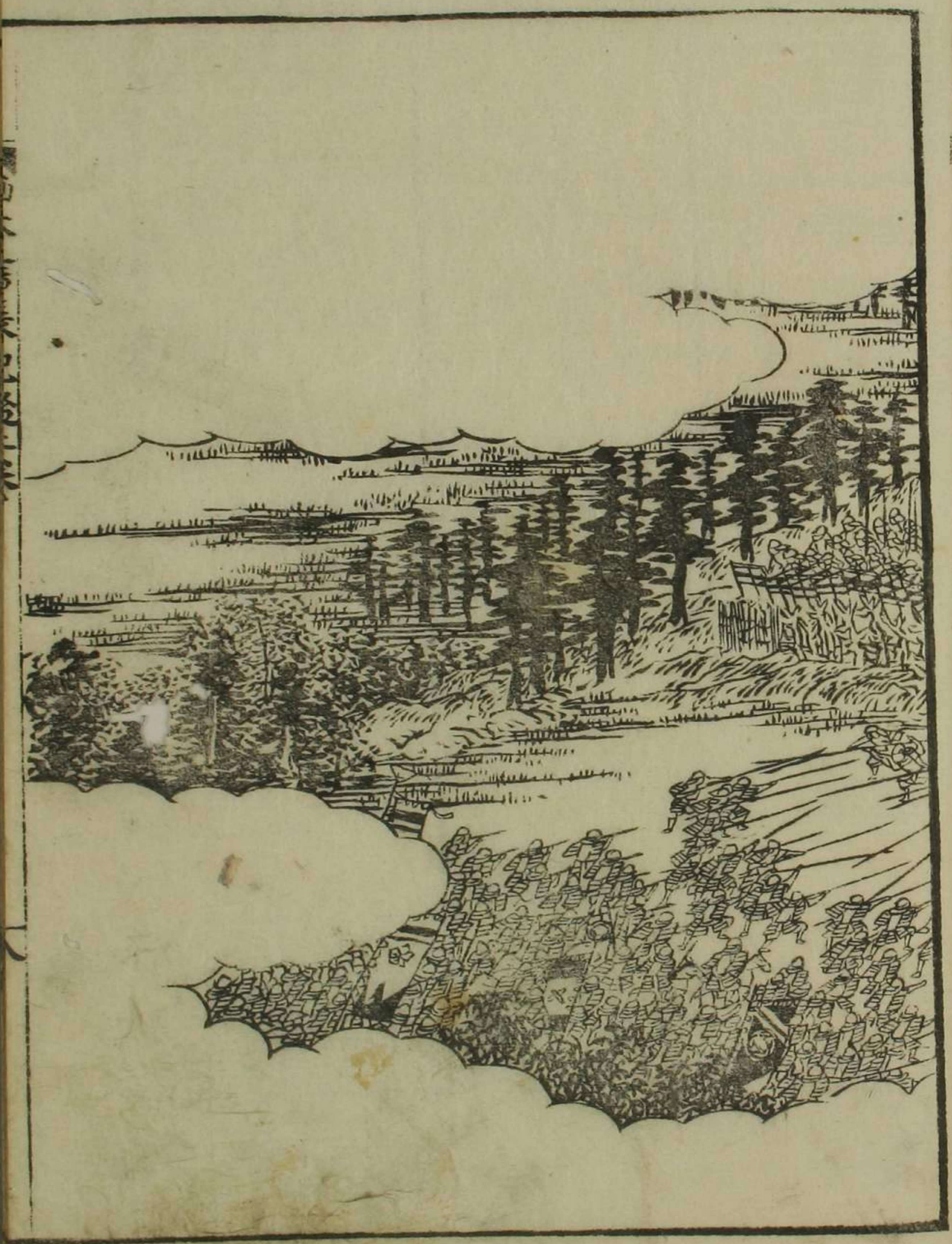
寺勢と討つて一棄えたる旗指物笠を被る等今も本願  
 せり徳山又ま湧の彼旗と押すのこのごとく計とぬらば我  
 又別の謀計を構へけ城と棄るは「實は抑ひて降参脱  
 変し徳山又ま湧其夜も勢と引受けしと河津城のわたりに  
 隠し居る其お目も志のつめの所より勝家豊政もごと  
 一むに勢と合せ城の正面より天地も崩れ中園と敵し旗  
 炮とあけ火矢と飛しけりつゝ又味方より城の中の一揆  
 等と急な途と曰く矢石とあけ防ぎ戦ひ年の越まで  
 せり合つるけ附あつるの後より南無阿弥陀佛の大籠二流  
 としと押す豊政が女の後を二三三斬りたはあつる陣  
 中騒ぎれも勢と又戻り分てつゝ我もぞ城の裏は太



きふゆりて... 門後の軍... 切て出さ... 人一擧の中... 城戸を用い... 向く我りん... ことばは... なるかど小... 見へば此... 陣勢と張... 大き小移... 南三三... 謀計... 臨... 一方と切破

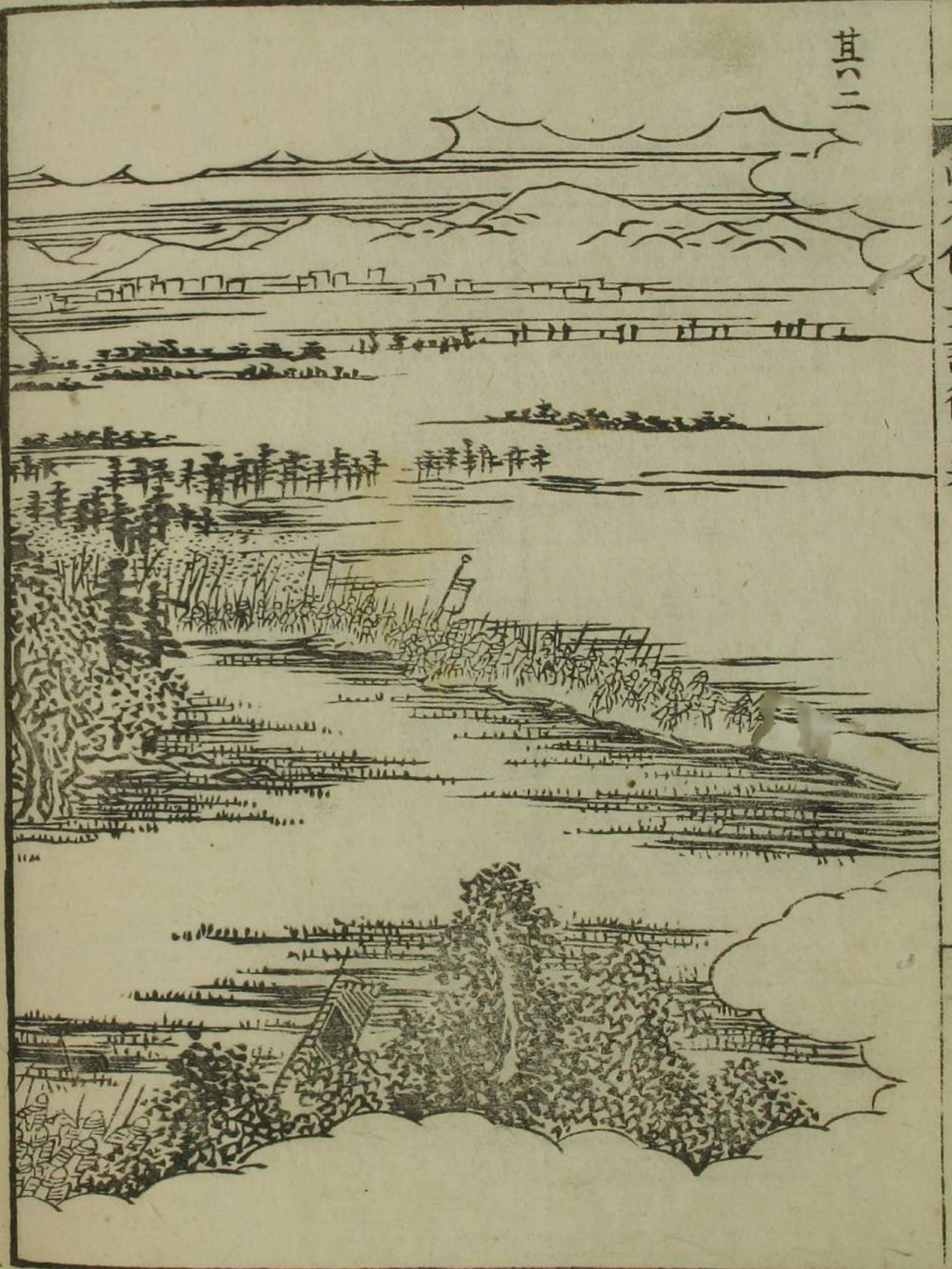
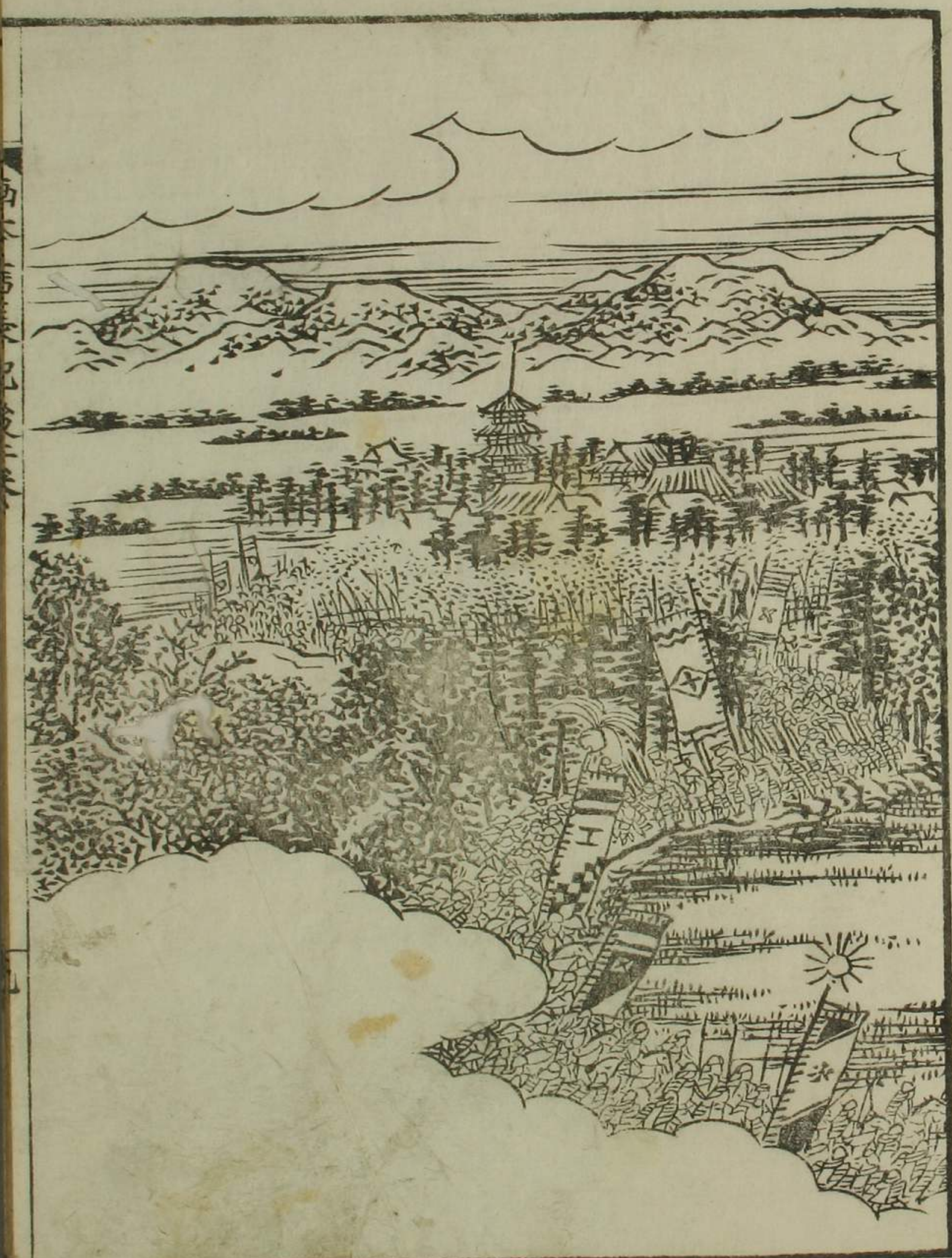
城の中へ引... 待設け... たごよう... 討らる... ちと母... ちと城... 砲と... よて... ちと... とつ... 馬より





日本  
長  
言  
集





其二

画本信長記後二卷



飛し又引くと跡んとしれが考ぬの大軍に方どりこし雲霞  
 りどく進軍し進退安し飛すより馬よりりりて後軍は勝  
 家盛政勝園と上城又火とじし焼立変る軍兵と率  
 て松竹の城と美濃勢ひ竹と破がごとくおれが尾山乃  
 岩小築たる門後勢も城を捨く後の一揆大抵辭り  
 多し切た首耳鼻と刺おせ使者と安去へまて勝軍の  
 始終を言よに及びたるぞ濃の中しく見入るる

小田お士攻石山寺

日年冬土月信長之内去居の右おおは任じ終る明年天  
 正又年の春正月よりよりや松州御出馬乃御燈あり  
 たるをに紀州難攻郡又一向宗門後の一揆降記せるより

用波しれが信長と波しりさ道先も難攻の一揆多兵糧  
 運送と仰り天王寺の陣と焼味方故ゆ及びり其う  
 紀州の各園をいまぞ我もに属せ先南園と平げ其後  
 又松州と美濃などごとく俄に陣ぶれり其園を圍く  
 ありありに紀州難攻の内三城の若も根来寺の法師故  
 乃坊多降降して忠節と勵しんき言と及びり信長  
 云作客あり其若もと先んに加入紀州表(後向)終る  
 け耐石山の附城守衛の面く令し終るに試は石山(押  
 勢)一合戦にじりて勝敗の候より門を破り其表(後向)  
 みんきよし(和)終るに附城の末おま久間右衛門尉信盛  
 又又松永通(少)久末右衛門佐久道輝(兵)彦次



秋隆武蔵守尾門中系御監後備年尾門丹波右近守  
傳で兼り城美の御記に及びたり其の中は松永久  
秀へ別は信長より報あり久秀ハ元来七地妻内もの  
るれい飛久秀より勤功とも立なれ不に一才の功あり  
耐收軍又及びり老功の武者の秘をさ不之今度の合戦  
又抄いり魁弱のありまひあふりる采光懐とまきより  
命に終ふ松永久秀澤で取り赤面してあつるが密に心  
あふやうに秋心中は志あがれ又然く我ひよ力と費さ  
信長元久き大なるれがや其ごと際し我らにまごを  
徳人と歎とらるる人今度の軍は烈しき戦いとほし悟  
耐信長の執懸を免さるはと諸おの備へ加ふにこの

勢三ふ余人をなて去所くと押せたり其外のみとひく  
と陣勢とつゝ鉢城隙三丁斗は備人先團の夢と後し  
け耐城中には既は兵糧は元勇瓦道しく歎のあつると  
居しおるれいさ進んぶおておなれ勢ひ之軍師重幸  
矢倉ふよりなるふ歎の陣隊と辱と傍をより見くやけ  
るいけり心勝の松永が備人母うる今日我ひは人へ  
うるる名と取いさんと懐怒合人とおまよりと見申  
おりいれも陣とよ殺元とより兵謀の戦いとらさば  
志見味方のえさるる人とも九州根来寺の傍は小密  
茶とらる大別法の陣と志摩とに即西人計と志所  
三ふ余騎の道兵とあ人南門の内は備人長相圖を見く





圖本傳長言卷三



小  
密  
茶  
勇  
我

圖本傳長言卷三



切て出だしと申合めおはとて雲り校回くは鉄炮と云らる  
 敵の近付と待居りし時小田方の無軍素敷を打て押  
 まり再び岡と敵とれは城中より岡と合せ互に矢軍と  
 こそはしめろる考るの中よりを中雄の兵士五十人柵  
 二重推破り堀をえ付とろんとし重撃を施して左右の  
 矢倉と鉄炮とろるべゆひ打ちあはる小矢倉に十二  
 三人打倒しぬ是は碎湯して進み得ざるは重撃射こそ  
 よろれとお國の無といらりせは南大門をろりしと開き  
 是れは根末乃小密茶屋華威の具足と云一丈余の  
 八角持は鉄の輪とひりといろると右に引さげたは  
 は大長刀小まきより追馬よも急めりは歩射とて

おどり出被八角持を斤のにおろし人馬のをろりしと云  
 ちく或の中天より叩き上げ横さまは七八間を打倒し近  
 く寄らる敵兵いたるにおし羅刀をそひひ上げ斬おし  
 一尺の白活と開き猛虎の群羊の中より入とて敵て近寄  
 敵のほしはに續いて志摩より即一万余人の勢を引て  
 一文字に松永が隊と目づけ討てろるべき勢ひろしは行  
 がたろりろんたろひく獲りて進まは松永も勢とろり  
 出へん戦んと進じが敵のあさまと刃く先も又敵て  
 うらば白眼合ていろろろ去程は小密茶屋のみも百余  
 の還兵と治に降人先多久向が陣と一まろりや打崩し  
 降谷武義がの打入る敵は徹庵より叩きろせ中へ



福家が備へを七割よりき此し八載の物なりし別勇壯気  
 敵より若くいふへ乃武義坊も是よりはいふを勝るべき  
 とある大軍よりひびのき七八丁の引より小密茶  
 の引より敵を鹿目よりき率又備へと老(まほ)し松永が  
 備への撰とまより毎二五三又討てくる是とんく志摩  
 ちに即日く岡と他つて松永が正面又突入く指獲んで  
 標よりたり松永の敵の博中又臨りたりとんく志摩と  
 ことか老功少しも強がば右邊門佐久るが一よとんく志  
 摩に即と戦しめより八百余人の鉄炮備へを老  
 右より小密茶が荒ゆる若後よりつるぶけておまは  
 じりの小密茶おまよりつるまより進むりとはとんく志

志摩より三よりたり志摩に即右邊門佐久るが備へを  
 くと右邊門佐のがはまじと士率より下知しと進ゆと松永  
 久秀の先とんく敵又捕り謀計あぞまより進てあやま  
 りせそとぬ衣乃武者をひて下知しと若氣よとんく右  
 邊門佐耳より入に弛りたり松永が軍隊二つ又別と備  
 へつけて下知しと先又彼を世し小田の軍ぬ多久間と始  
 め降が武義が軍松永討とる續けよと多久間と小  
 密茶が後へり下降が武義の志摩に即が老より討て  
 り下松永又ふと標合しと討んとはは討獲中より重  
 率が下知しと松永孫市郎日一捕去標平治津田去  
 佐佐木は空の坊入寺か宗寺を寺と始りし



寃美乃勇助數十負二万余誘乃大軍と引率し南門と  
 東西の三門と入きたに開き大波の逆とるごとくさ門と噴て  
 討て出志摩小密茶と新後左右より指をさきて突立  
 とは考ふの軍兵は勢ひは打碎と敷く又ぬく故水は  
 松永久秀の二の勢と急丸と体人に面八方は鉄炮の組  
 ととひしと並べ進より城兵とむらりくとお潮し雲霞  
 のごとく集りし城兵の其中と志保くど引返しに突と場  
 殺功若の老武者ると歎も味方も称歎しつる城兵は  
 ろく後又討勝長進して造とると兵とまどめ勝岡と三度  
 揚げ城中へ引入るる

重幸贈書令致松永幸

備も石山城中に勝軍の真と僅し如と人ごううお幸う  
 去と場は其忠誠と称し終人珍本重幸諸およ向ひ  
 中々つら今日乃我ひ考ふ故軍と及ぶと人ごも松永久秀  
 が一も証るも引し皆法ありきんが老練の兵心みく軍  
 と見たり歎め皆松永が知と守り謀斗と構へく美事や  
 乃方願難儀と及ぶじつしつし松永がみ換と見る小渠え  
 今信長が幕下に後と人ごも考ふに二心といはれた信長を  
 眼むけたる苗城へ向ふり教を及ぶとも力と盡し致さる  
 及し今日なめく軍威をうやばして押来りも只も勢乃換  
 ころくくんのを要とし強て功とえんととの軍えよあし我





重幸  
 書を  
 讀んで  
 松永と  
 びて

西本信長記後三卷

三三



滋シと書と久秀キウシウ又送川オウカハ信長シノブネ又敵テキしめ是又方カタの一属イツリツ  
みくミクと雜率ザツ又命メイじシ松永マツナガが陣ジンと書と送オウるそ乃文ノフミ  
曰イハレく

今日小田コノヒノコノヂをシぬ士シ及ツ級軍ケイグン之ノ知チ足下ソノタラシ有アル其中ナカノ而張ニテ  
陣勢ジンセイ各屋オノオノ之ノ安ヤス苗世ネノヨ之ノ英雄ユウウ可謂コトヘ有奇術アリキジュツ矣信  
長原多シノブネノ猶疑ユウギ忌賢良キケンリョウ如謀臣ニシテ可足下コソノタラシ蒙遂モウズイ火可  
勝英雄シノブネノ而益大志ニシテ足下ソノタラシ若據州郡ニシテ得為ニシテ自立ニシテ謹而踞  
旗下タテマ為一軍ニシテ焉

天正八年三月

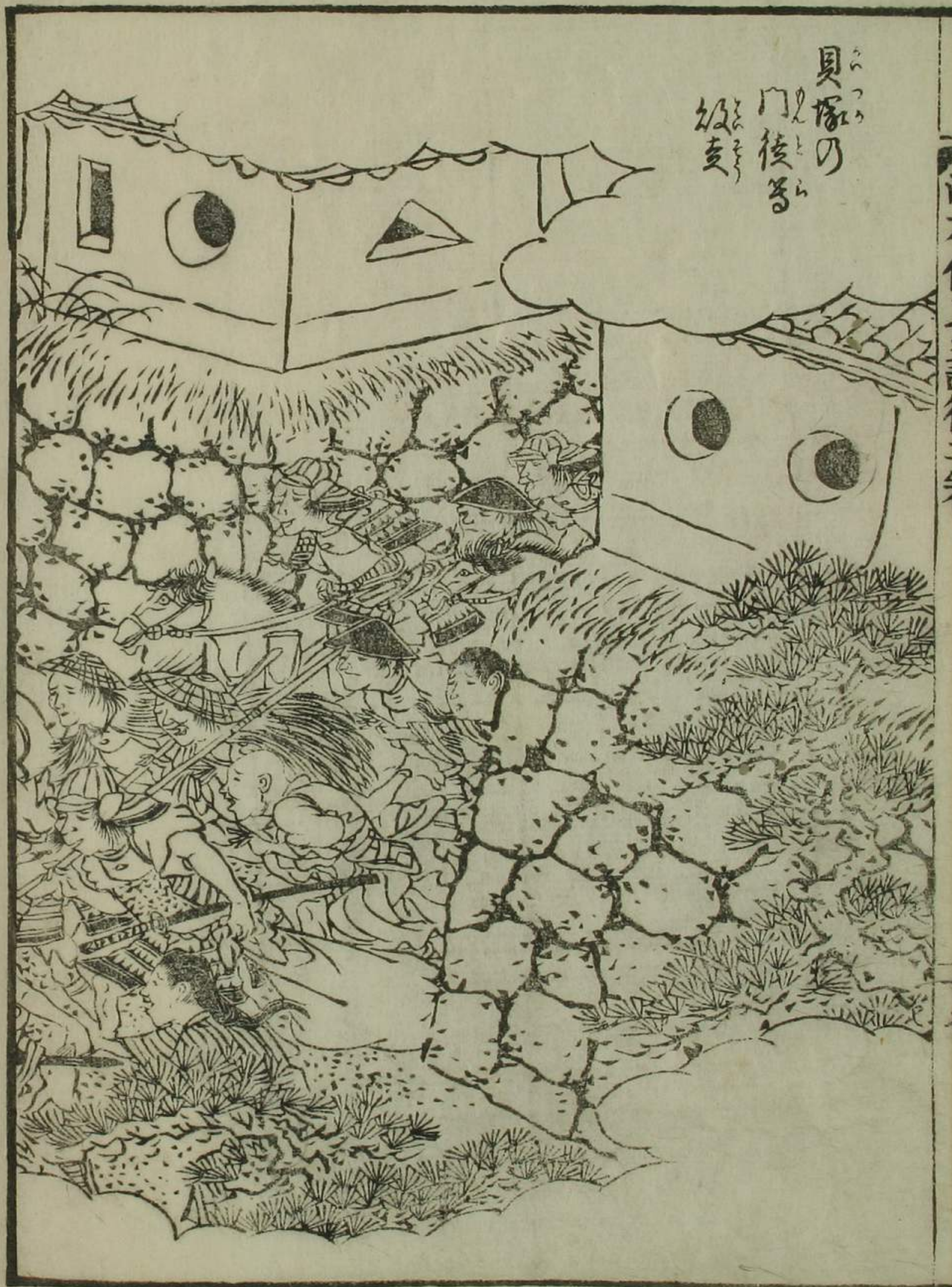
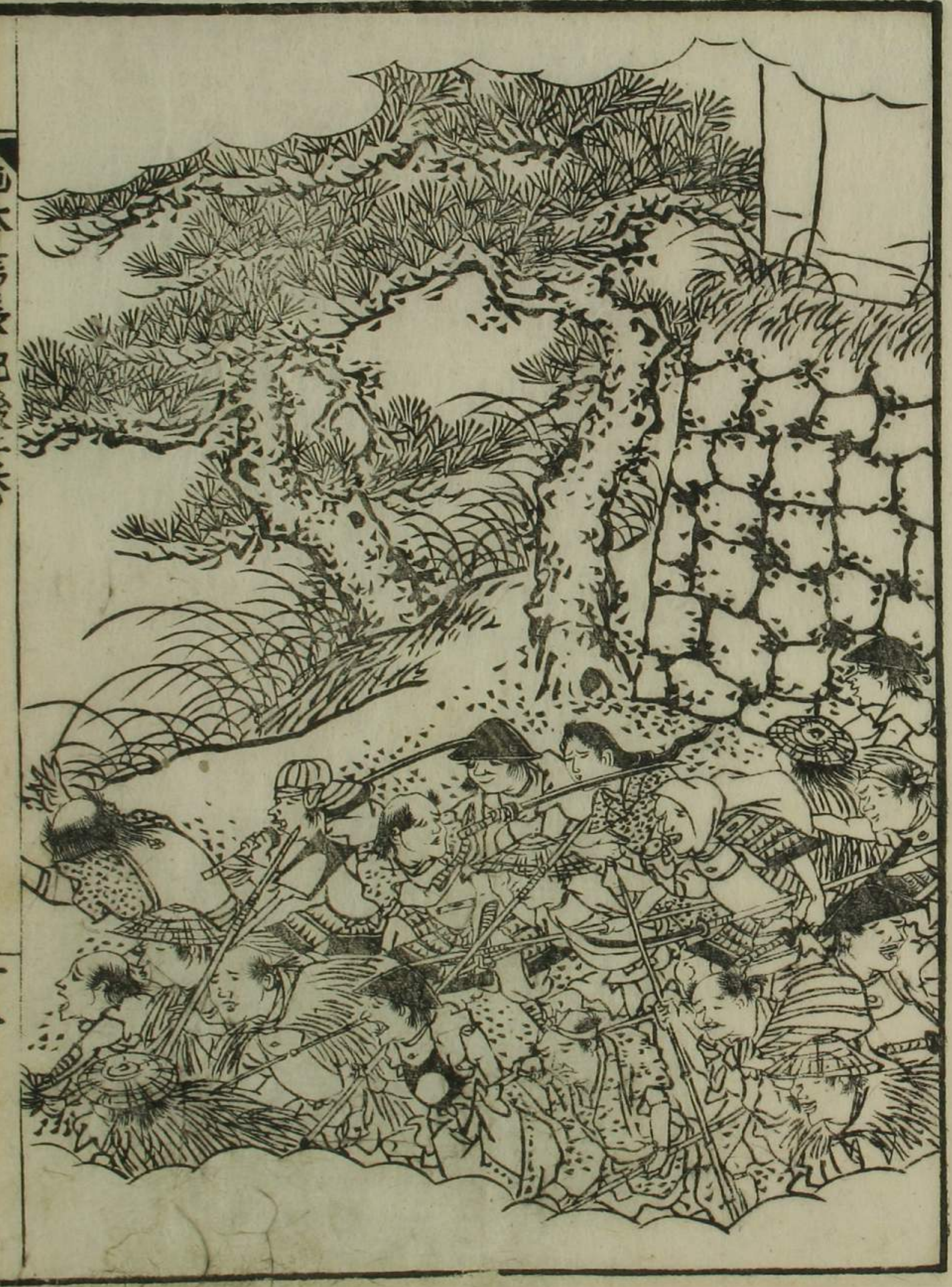
松永源右衛門尉重幸

松永彈正少弼殿

松永マツナガけ書とたタく歎息ソウシツして止ヤメび終ハシる又逆サカシの志シと敵テキ専センら討ウチ

節マドと見合ミアせたり去サ後ノチ又小田内コノヂノ大長信長オホナガシノブネの石山表イシヤマノの勝級シヨウケツ  
をシ安ヤス治チりぬ先マサに軍勢グンセイと進シめ紀伊國キイノクニへ押入オシイリ路ミチ入イリ門後カドノチ乃  
一揆イツクワイ者モノ貝塚カイヅカとシり不フに城シロと構カマへシ日百人斗ヒトヒヤクニ掃蕩ソウドウし又小田乃  
先陣サキジン城シロ久キウ右ウ政セイ也ナリ又貝塚カイヅカへ押来オシキると若ニシテくシるふに  
又報恩ホウオンと命メイと捨スんと折セるに門後カドノチ乃一揆イツクワイも指揮シ揮ヒとる大  
おるたれ又歌ウタの旗ノボリもともんぬ其後ノチ船フネも又ナりて雜ザツ  
賀表カハヒへ引ヒくぬ河カハが軍共グンキけりシを安ヤスと等ヒトしく追討オウチウして百餘ヒャクヨ  
級ケツの首ウチをたタり信長シノブネ云物イハレモノとじめはしと軍グン率ソウ又下知ゲノチしと  
ませ給タマふ堀ウツリ久キウ右ウ政セイ也ナリ一番ヒトヒト又池イケ向ムカへく小雜コザツ賀カは又馬ウマと入イんと  
しつる給タマふ一揆イツクワイをシるき海ウミの上ノより大木オホキ大石オホイシと打ウちあし  
弓鉄炮ユミテウ雨アメのどく又敵テキちたれぬ堀ウツリが軍兵グンヘイ者モノとく打ウちあし又丁





貝塚の  
門後  
級  
麦

日本書紀

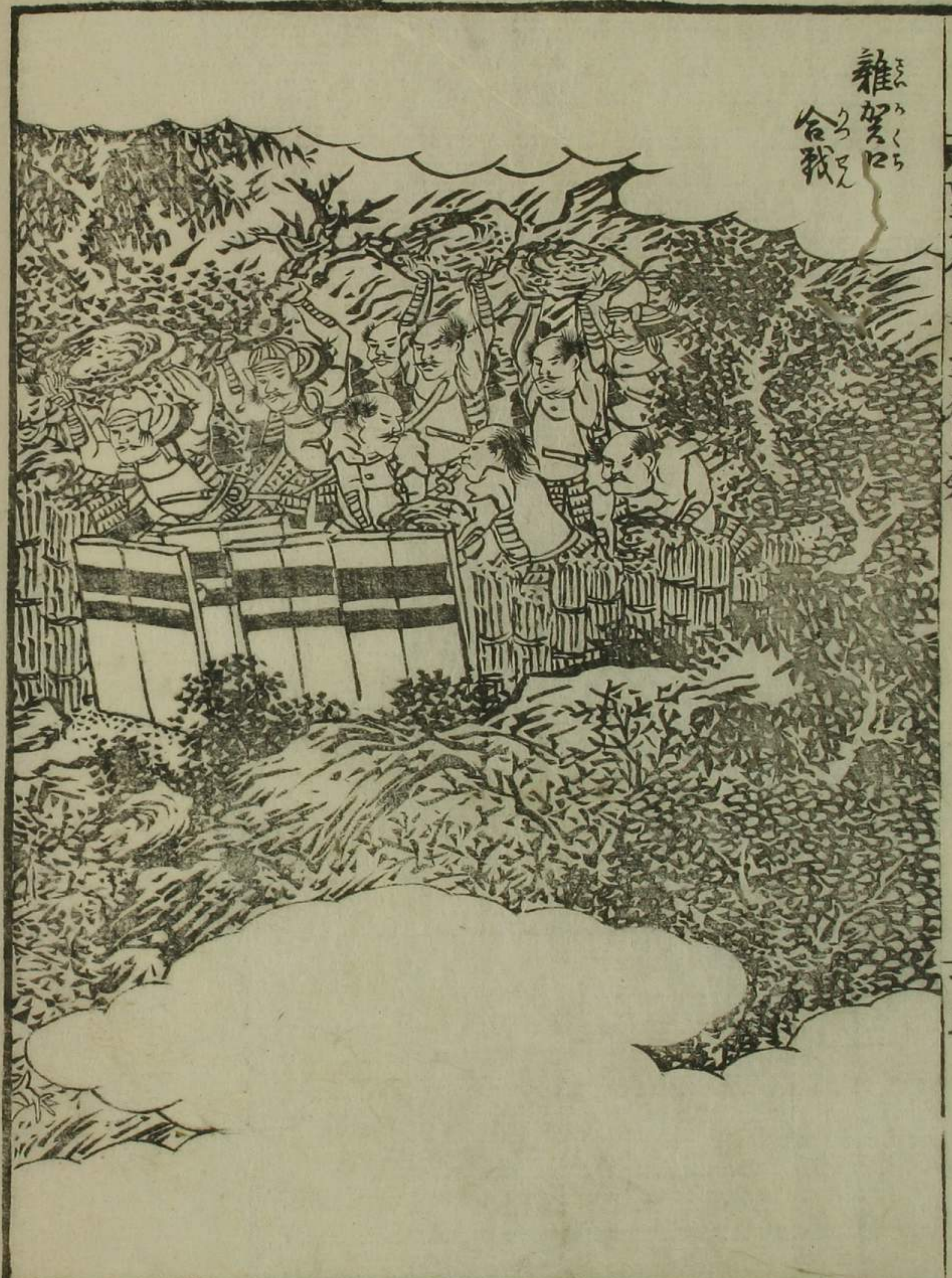
日本書紀



引退てたゞひつる溪のふより向ひし人々は澁川を渡る  
 帷任日向守帷任又即左馬門細河兵部守備長等三  
 万余人谷乃輪より推しよんが一揆の者とも細河がふ一  
 将と付換炮をおくけいし我れが小細河が家のふ米田助  
 右馬門の右に即右馬門下津指内成原本右馬門など場敷功  
 若の勇士志先と槍と入突立しく血戦としが一揆方終にお  
 負中おの城は入く望く防戦の体へとはし再び討て出れ  
 りは信長への嫡子城を助信忠満軍と引て中お城は  
 柳よせ三日三夜息も終せば妻付たるが城の中の一揆方と  
 落外若るは中兵は皆城と困ひく降参るはけし信長と  
 本陣と近く後より難攻の城へ参りし諸大おる

を定め三月朔日卯刻より城際へ柳よせ竹箒と附お摺とと  
 是も三日が程の昼夜の城をも参りし噴き叫んでせり  
 けは城の中防禦の御重く松田源三右衛門兵衛等  
 本左馬門を栗村治郎右衛門三郎右衛門連署して降参  
 を乞ひ出表一海に御宿し給りる小おひく石山御陣の時  
 御方より参り給りし御助力中へき高中により御報免候  
 付らる三月廿八日御陣拂ひあり其日若宮八幡へ御陣を  
 移され堀久右衛門不破河内守丸毛兵庫次郎村長と清水  
 中左衛門亮生約市左馬門等と命じし根素寺に乃立  
 不くと放火し二揆の者と薩斬り切捨らるるしは板の房  
 の兼く御方より参りしと僅に根素寺と今くのし





雑  
合  
我

日本傳長崎後二卷

十九



終入月廿八日津田左郎左衛門と佐野の城よりめられ紀州  
 の仕置とも終合めらるとまより或は石山へ陣陣と向へらるる  
 まよりしつ勢州若の團司小島具教生害の後藩代の家臣  
 ひそと強と居りしが南都赤門院の院より具教入るの才  
 りしが忽謀叛とともり遠信せりし中島具親と名乗らせ教  
 万の軍兵を詭集れ森の城に捕獲せ勢の漸強大らりと詭  
 くれ信長云先勢州を征伐みよしとて一度本城去陣陣  
 はしくせり勢州陣陣の陣定二區くせり小紀州難装表の  
 の一揆いまご悉く去りまらび不くと群集せりよしはへけき  
 天王寺の附城を守居る多る久向右衛門尉信盛又まは  
 付らと紀州表へ發向し一揆京と退治しを放火せりめら

天王寺の砦石へ羽柴統元守秀吉と以て暫く交番せりめ  
 終入石山の城中けりめをせり羽柴統元とて争ひ敵と先  
 敵の私辱と雪ぐ軍師重幸が下知りたは下向三位と大  
 おし西口守内を渡り計高松三之丞等とはじめを毎々  
 乃若とも六百余人討て出貝田塚のとも馬武者少く相へ  
 させ塚の陰に鉄炮のふ番又百人計伏居り足腰とりけ戦  
 ひを攪りたる秀吉と見ると中村武郡阿国万入即兩人は  
 命じて塚のともり敵と討り堀尾常刀は三百余人の鉄炮  
 の狙りと授け計策と中合めり向しむ三お命と令じて  
 お出がけめり津田多く馬の詭引差来る多しと中村  
 武郡少しめらるる氣さるく一まかりは塚のとも討ては阿







因万又即の勢を引て塚の丸と号して討てりるひて是時  
 のころに石山勢臨し交へて戦ひしが今の伏兵の鉄砲を  
 引ておろしととらるる塚尾軍刀三百余人塚の東の  
 方へ推まはし石山勢の伏する中とせんぐは打倒せば並ての  
 軍略お遠して討る者殺をえりて塚尾中村阿因乃三お  
 一勢又岡と焼く塚より山へまくり落し斬立難立三丁斗り  
 追まきとる事と討る者又甚まはし討る石山城の中とせん  
 重撃大さ小勢さ羽柴秀吉の勢の敵よりいひ謀  
 の戦ひしく大を引出さば後悔ととも甚まはしとせん  
 本線市は一楯又二万余騎乃遣兵と授け天王寺は援兵  
 とく池田いせ程心りくやろいん定方と志摩とに

即の両人又二万余人をとて派遣て味方と枝けしむこの時  
 羽柴方の三おの逃る敵と追打勝は承じて戦ふ不し本線  
 市が二万余騎岡と焼く討くく入交へて難合を  
 互に死傷の者多くあははけさる大戦と驚さる者には  
 秀吉遙くは伏しと見とる若者も勝は承じ不思議に戦  
 ひとりひと危多れとて朝野跡平は命じ西よりる民家  
 又敵多所火ととらるる西風強く吹く忽かの東の方へ  
 るひき黒烟大地と蔽ひ両方の軍兵胆天の向と希ひ秀吉  
 下知して烟の中より敵の甲軍へ抄びけく鉄砲と打らるる  
 ばはしといはしし本軍兵私に強きく進み得ば其ひき小  
 塚尾中村阿因の勢と焼くは悉く城中へ引入城戸を固ておる





ありてさうりら  
堀尾中村  
石山勢と  
戦人

日本外紀卷之三



石山の城（石山）中（中）より（より）の定（定）の坊（坊）志（志）摩（摩）子（子）に即（即）息（息）と切（切）て馳（馳）来（来）る（る）と欲（欲）  
 兵（兵）の（の）や引（引）と向（向）ふ（ふ）る（る）た（た）お（お）も（も）り（り）く（く）勢（勢）とま（ま）と（と）り（り）是（是）も（も）石（石）山（山）へ引（引）  
 入（入）り（り）今日（今日）の戦（戦）ひ（ひ）羽（羽）此（此）本（本）が（が）子（子）へ討（討）え（え）着（着）八（八）十（十）余（余）級（級）出（出）城（城）番（番）の物（物）  
 是（是）じ（じ）は（は）「（「）」（」）と（と）ま（ま）ぬ（ぬ）者（者）も（も）ら（ら）ず（ず）」

繪本拾遺信長記後篇卷之三終



